学習者オートノミーを促す マンガ・モジュールに関する一考察
－台湾の大学における日本語会話のクラスの事例から－

木原　直子

要　旨

自ら求めなければその目標言語に接することのない外国語学習者にとって、オートノミーであることは、外国語を習得する上で重要である。1980 年代以降、外国語教育の分野において、学習者オートノミーは活発に討論されてきたテーマにも係わらず、学習者オートノミーを促すような実践を紹介したアクション・リサーチは少ない。本稿では、台湾の大学における(日本語専攻者向けの 3 年次の)日本語会話のクラスにおいて、マンガを用いたアクティビティを実践し、学習者オートノミーを促進することができるか、なるべく自然な状態でデータを集め、そのデータを分析した。また、そのような通常の授業内容以外の教材・タスク・アクティビティを管理する方法として教授モジュールという概念を提案し、その概念を基にアクション・リサーチを実践した。結果、短時間での実践等の制約があっても、学習者のオートノミーを促す可能性が学習者の認識レベルにおいて示唆された。また、意識的に教授モジュールとして管理することで、教師の授業準備時間の短縮および教授知識の累積につながることが明らかになった。

【キーワード】学習者オートノミー、　日本語会話のクラス、　教授モジュール、　マンガ、　台湾人日本語専攻者

1. はじめに

1.1 マンガを活用した授業実践の先行研究

日本語教育実践の場で、マンガがオーセンティック・マテリアル(素材)として用いられてくるようになった。因(2005)は「話し言葉が状況と共に提示され、しかも音声情報のないマンガの中には形式と意味の関係を観察するのに都合のよい素材を豊富に見出すことができる」と述べている。4 コマ・マンガを見せ、何がおかしいのかを発見させたり、台詞を隠して学習者に想像させたり、1 人 1 コマを担当させて会話を通じながら仲間と共にストーリーを組み立てていくアクティビティなどを岡崎(1993)は紹介している。また、マンガを用いて文化を観察し理解させる目的の取り組み(例：因 2005)や、批判的思考育成の素材として用いたアクティビティ(例：田代 2009)がある。更に、川那部(2006)は、日本人学生に対し異文化理解教育を促進するため、マンガを用いている。このように、マンガを素材として、討論して、色々な人の意見を聞き、解説を聞いたりして、異文化の理解を深めるのに役立つアクティビティが紹介されている。

マンガを素材として使うことで、どのような人がどのような人に対して、どのような場面でどのような話し方をしているか観察することができる。また、マンガや小説を読むことで、登場人物の心の内面まで観察し、その態度・行動の背景を知ることができる。学習者は日本人のように思考したり行動したりする必要はないが、日本語の知識や運用能力以外にも、日本人の思考・行動スタイルに関する理解を深めることで、学習者が似たような状況に置かれた際に日本人の好意を敵意と受け取ったりする誤解釈の確率が少なくなると思われる。更に、どのような状況で、どのように話すのかを疑似体験したり、他の人の意見を聞いたりすることで、類似した状況でより適切にコミュニケーションをとれたり、その国の人と同じ振る舞いをしなくても、誤解を招く事柄について理解を深めたりできると思われる。そういう点においても、状況を視覚的・言語的に提示するマンガは、クラスで討論する素材として、もしくはじっくり文化を観察する素材として大きな可能性を秘めていると言えるだろう。

1.2 研究背景

台湾のような中国語を母語としている学習者の場合、漢字は書けるが読み方が分からないという場合がある。研究対象のクラスは会話のクラスのため、筆記テストで話す内容を書かせる際、すべての漢字

に読み方をつけるよう指示したところ、基礎的な漢字でさえ読み方を間違えて覚えている人がかなりいることに気がつき、筆者はマンガ・モジュールの利用を思いたった。多くのマンガは小学生も読むことを考え、全ての漢字には読み方がついている。更に、マンガは絵がついており、多少言葉がわからなくても、読みすすめることができ、オノマトペが多く、会話文が中心という特徴を持っている。オノマトペは、日本語で円滑にコミュニケーションをとる為に重要である(小野 2009:216)。また、日本人の行動スタイルや考え方(例：ニュアンスなど)を理解する上でも、討論の素材として適している。心理学方面の実験では、マンガは長期の記憶保持に効果的で、注意を引きやすく、学習意欲を高め深い知識に結びつく可能性が示唆されている(向後ら 1998)。

台湾人の学生(少なくとも、本調査の協力者)は、アニメ・マンガ・ドラマ・タレントなど日本のソフトパワーに影響され、日本語学科に入学志望する学生が多いにも関わらず、マンガは好きだけど中国語で読んでおり、日本語でマンガを読んだことがないという学習者が多くいることに、筆者は授業時間外の学習者との談話を通じて気がついた。また、マンガを学習の手段と捉えている学習者は殆どいないように思えたので、マンガ・モジュールを開発する重要性を感じた。

しかし、授業で実践するモジュールの究極の目的は、マンガ・モジュールを通して、マンガだけでなく、効果的な学習方法について考えるきっかけとなり、学習者のオートノミーを高めることにある。なぜなら、学習者によって、興味・効果的な学習(習得)方法は異なる。また、それぞれの教材や素材には、優れた点もあれば、他の教材・素材の方が優れているという点もある。各学習者は自分にとって必要なスキル・能力・知識を自分で認識し、自分にとってベストの学習(習得)方法を選択し、実行していかなければならない。つまり、日本語学習(習得)に対してオートノミーにならなければならないのである。

1.3 学習者オートノミー

学習者の第二言語習得に大きな役目を果たす学習者オートノミー(learner autonomy)の重要性が広く知られるようになって久しい。第二言語・外国語教育の分野において、学習者オートノミー(以下、オートノミー)の定義は、Holec(1981)の「自分の学習に責任をもって計画し実行する能力」が一番広く知られているようであるが、その定義づけ以降も、オートノミーとは「状態」「スキル」「能力」「学習者の責任」「権利」という様々な面で解釈されてきた(Benson & Voller 1997)。このように、オートノミーという概念は一義的に定義することが難しく、何をもってオートノミーを促進すると言えるのかが明確に言えなかったり、授業で取り入れにくいことから、学習者にとって重要な事柄であるにも係わらずオートノミーの実践研究は非常に少ない。

本稿では学習者の能力と態度というオートノミーの心理学的側面にスポットを当てる。具体的には、「学習者オートノミー」とは、「学習者が自己の学習を効果的に促進することに意欲と責任を持ち、かつその能力を持っている状態」とする。言い換えると、本稿が指すオートノミーとは、状態(自分の第二言語習得に対する責任感)だけでなく能力でもあり、教師が授業中に学習者に効果的な学習について意識させたり、自らの学習を内省させたり、学習ストラテジーについて説明することで学習者オートノミーを促したりすることができるものである(例：Oxford 1990:11)という考えに立脚している。学習者の学習態度が受身であったり、効率的に学習することを意識していない場合、もし教師が学習者オートノミーを促すことができれば、特に学習者の授業外での学習行動にも正の影響を与えることになり、教育上重要な意味をもつと考えられる。

また、オートノミーは、第二言語習得上重要な概念である動機づけとも密接な関係がある。なぜ学習者がオートノミーであることが重要かという問いに対し、Little(2003)は「(1)内省的に自分のこととして集中して学習に取り組むということは効率的･効果的な学習につながりやすい、(2)自主的に自分の学習に責任をもっていれば、動機づけの問題は自然に解決される」という考えを述べている。内発的動機づけに関連する 3 つの心理的要求の 1 つがオートノミー(Deci 1992)という考えや、「オートノマス(自律的)な学習者は高く動機づけられ、オートノミーが更に良い、更に効果的な学習に導く」(Dickinson 1995)という研究結果も発表されている。また、教師が学習者オートノミーを支持する態度をとれば、学習者は更に授業に熱心に取り組むようになる(Reeve et al. 2004)という実践研究も報告されている。

効果的に学習する為には、メタ認知や学習ストラ

テジーが重要になってくる。メタ認知は、メタ認知的知識とメタ認知活動に分類されたり(三宮 2000)、メタ認知的知識とメタ認知ストラテジー(Wenden 1998)に分類されたりする場合があるが、両者の分類の仕方は類似している。メタ認知的知識とは「学習についての知識」(Wenden 1998)であり、メタ認知ストラテジーとは「純粋な認知作用以外の、学習者が自己の学習プロセスを調整する方法を提供してくれる活動」(Oxford 1990:115-119)である。Oxford はオートノミーもメタ認知ストラテジーも、外国語学習を成功させる為に重要であると考えており、筆者も同じ意見である。

1.4 教授モジュール

このような通常の授業内容の目的以外の知識を教授したり能力やスキルを育成するには、(あるいは授業内容をより深く理解させるためには)、通常用いる教科書以外の教材・タスク・アクティビティをモジュールとみなし設計・実践・管理することが得策と考えられる。モジュールという概念は、「全体からいえば取替え可能な構成部分であって、しかも一つの働きをする部分」(野嶋 2000)であり、日本語教育の教材としてのモジュールの特徴としては、独立して使うことが可能な教材であり、学習者のニーズに応じて、教師が使うか否か判断できる教材である(岡崎 1989:33-35)。教育学において、教授モジュールを開発・評価した実践研究(例：Hutchinson ら(1992))はあるが、第二言語・外国語教育の分野において教授モジュールという概念に着目した実践研究はない。

学習者のオートノミーを高め、内発的動機づけを高めるには、教師の学習者に関する知識・理解を基軸に授業デザインを設計する必要が出てくる。社会構成主義の考え方に基づけば、学習に影響を与える大きな要因として、教師・学習者・タスク(教材)・コンテクスト(環境)(Williams & Burden 1997:42-45)をあげることができ、学習者に適切な教材のみ使っても最大の効果は望めない。つまり、教師が、適切な環境づくりのみならず、学習者に適したモジュールの教授プロセス(展開方法)まで気を配る必要が出てくる。このように、モジュールを授業で実践する際の教材だけでなく教授の手続き、教授スタイル等、このような教授項目に関する知識をまとめたものを、本論文では「教授モジュール」と呼ぶ。つまり、本稿における教授モジュールとは、教師が授業で実践するモジュールに関連した教材・素材・ツール・知識全般を指す概念である。

教師が常にベストの状態に保たれた教授モジュールをたくさん持ち、教授モジュールを系統的に管理することによって、授業実践において授業設計と異なる状況に面した際、教師は学習者のレベル・興味・好みのスタイル・授業の実際の状況等を鑑み、急遽、適切な教授モジュールを選択し授業を進めることができる。また、実践だけでなく、主に授業設計をする時点で、上手に教授モジュールを組み合わせることで、効率的に、効果的な授業をデザインすることが可能となる。使えば使うほど、学習者の反応、教授法の反省など、メタ教授知識が増え、より適切に使うことができるようになる。

教育分野における管理方法の 1 つに、ポートフォリオ管理がある。数種類あるポートフォリオ管理の中で、教授モジュールを管理するという視点に一番近いのは、コース・ポートフォリオ管理である。その特徴は Hutchings(1998)によると 4 つあり、①教師が実践内容・状況を記憶するのに役立ち、②学習者の学習を調査する機会であり、③教室という隔離された状況を打開し、④管理者が秀逸な教授を識別し、報いることができる、という点である。

本稿では実践者が気軽に試せる方法として教授モジュール管理を提案する。それは、教授モジュールを PDS サイクル(plan-do-see cycle)で常に改善しながら、教授モジュールを管理していく方法である。PDS サイクルとは、教師が授業内容を計画し実行し振り返りその授業実践から学んだことを将来の授業に生かすというサイクルである。その主要目的は、他人に見せたり、評価の為にするのではなく、あくまでも学習者の為である。現職の教師が自分に適した方法で、管理すればいいという考えである。つまり、本研究で提案する教授モジュール管理とコース・ポートフォリオ管理の類似点は学習者に焦点を当て、より良い教育を模索するツールという点(①～③)であり、異なる点は教授モジュール管理は、教授評価の為でなく、教師自身が教授モジュールを把握できればいいという点(④)である。

筆者の教授モジュール管理方法の場合、アジェンダ(授業開始時に学習者と共有するその日の授業計画)や一部の教材等はパワーポイント、内省メモとフィールドノートは特定の冊子(書く内容が多かった時は、パソコンで執筆し、特定のフォルダーに

保存)、DVD は特定の DVD フォルダー、その他は特定のクリアフォルダー等にわけて整理し、いつでも必要な時に確認できる形にした。そして、授業実践から学んだことを将来の授業に生かすという意識を常に持ち続け、教授モジュールは将来使うかもしれないということを念頭において授業実践し、フィールドノーツと内省記録を特定の冊子に書くようにした。このように、筆者の場合は、自己流スタイルながらも必要な情報を必要な時にすぐに探せる形態にし、授業改善を常に意識するスタイルであった。

以上の点を踏まえ、本稿では、学習者オートノミーを促進させるようなマンガを用いた教授モジュール(マンガ・モジュール)を日本語文学科(中国語の正式名称は日本語文學系)の会話 3 のクラスで 2007 年度受講者、2008 年度受講者に対して、筆者(以降、教師)が実践したアクション・リサーチである。会話クラスの受講者数が多くない為、この 2 つの非常に類似した条件のデータを統計的に統合できるか確認の上で、統合して分析する。教授モジュール管理に関しては、2 年目の授業準備・授業実践にどのような変化があったか、教師の内省を通して考察する。

1.5 研究目的

本稿では、マンガを用いて、メタ認知を刺激し学習者のオートノミーを促すモジュールを設計し実践する。課題は以下の通りである。

(1) 外国語学習における学習者オートノミーを促すことを目的として設計されたマンガ・モジュールを実践し、効果的に作用するかどうか調べる[1]。

(2)教授モジュール管理の実践から得られた示唆について記述する。

2. 方法

2.1 調査協力者

調査協力者(以降、学習者)は、2007 年度の会話 3 クラス受講者 36 名の内、マンガ･モジュール実施日に出席した 33 名と、2008 年度受講者 25 名中、実施日に出席した 22 名の合計 55 名である。クローズ質問に関しては、無記名箇所があった 2007 年度 3 名と 2008 年度 2 名を除いた 50 名を対象にした。

学習者は会話 3 以前に、オーディオ・リンガル・アプローチを主とした会話のクラスで 2 年間、構文や簡単な対話を中心に学んできており、会話 3 は応用レベルの会話クラスである。

2.2 マンガ・モジュールの設計と実践

マンガのコンテンツは、全ての学生が興味を持ち、日本語が学べる内容のもので、知名度が高いものという視点から、「こちら葛飾区亀有派出所」[2]を選んだ。内容は政府の税金の無駄遣いに市民が立ち上がるという部分で、マンガで日本語を読む長所を体感させることにした。

まず、マンガ見開き 2 ページ分を見せ、学習者に読ませた。その後「このマンガについて」と「この部分について」の説明をし、教師がマンガを読み上げながら、教師のコメントを会話形式で伝えたり、簡単な表現にリフレーズしたりした。読み終えてから、「私がマンガの一部を皆に見せた目的は何だと思いますか」と尋ね、3－4 人のグループで話し合わせた。その後、答えたいグループに答えてもらうという方式で尋ねた。数グループの意見を聞き、それぞれの意見に自分のコメントを加え、皆が納得する方向に話がまとまるようにした。教師が教えるというよりは、学生に考えさせ自分達で理由を考え出させる方式で行い、教師は学生の意見に対して否定的なコメントは一切しないようにした。最後に学習者の考えを発展させる形で、教師自身の考えを述べ、学習者のオートノミーを育み促進することを意図した内容を学習者に伝えた[3]。以上のアクティビティ終了後すぐにアンケートへの協力を求めた。

2.3 調査方法

学習者の反応(顔つき、討論の熱心さ、身体の反応)の観察記録やアンケートの自由記述等のオープン・クエスチョンの質的データの他に、5 段階尺度で回答を求める意識調査から量的データを入手した。

2.4 質問紙の構成

アンケートは 5 段階尺度(5：非常にそう思う～1：全然そう思わない)で答える部分と自由記入欄の部分がある。クローズ質問は 3 項目で、(1)全体的な認識を問う「教えてもらってよかった」(以下、「感想」とする)と、(2)方法の有効性を問う「この方法でやれば日本語の能力が上がると思う」(以下、「能力」)と、(3)認識レベルにおける行動指標となる「将来やってみるつもり」(以下、「行動」)の 3 問であった。また、オープン質問は、(4)「漫画やインターネットを通じて、日本語力アップの方法を説明しました。これらの勉強法に関する感想は？」と、(5)「その他、感じたことを書いてください。(クラスメートにお薦めの勉強法などがあったら教

えてください。)」であった。

3. 結果

3.1 アンケートのクローズ質問

2007 年度と 2008 年度のクラスの回答内容に統計的な差があるかについて、マンホイットニーの U 検定で調べたところ、「感想」(U=237.00, *p(*両側)=.144, *n.s.*)、「能力」(U=246.50, *p(*両側)=.242, *n.s.*)、「行動」(U=243.00, *p(*両側)=.224, *n.s.*)であった。いずれも、90%の信頼区間ですら統計的な差が見られなかったので、データをまとめて分析する。

図 1 は、クローズ質問の棒グラフである。学習者は全体的に肯定的に捉えており、学習者の認識面における将来の行動レベルでも 50 名中 41 名(82%)が行動に移す予定であることを示しており、授業内の内容が授業外の行動にインパクトを与える可能性が大きいことを示唆している。

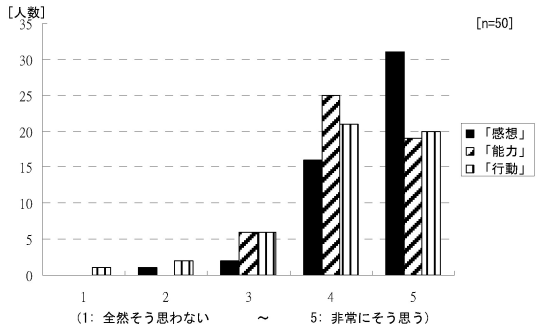

図 1 マンガ・モジュールに対する学習者の認識

次に、ミクロな視点から、各人の「感想」「能力」「行動」3 項目の相対的評価パターンのデータを分析したところ、「感想」と「行動」を同じレベルで評価した人が 6 割で、「感想」の方を高く評価した人が 4 割だった。つまり、教えてもらってよかったとは思わないが、実際にやってみるという人はいなく、実践した価値を示している。

最後に男女間の差があるか、マンホイットニーの U 検定で調べたところ、全ての項目において統計的な差は見られなかったので(5%水準)、性差による違いが顕著でないと考えられる。

3.2 アンケートのオープン質問

感想を書かせた自由記述式質問(4)に対して、「効率面」「情意面」「発展・まとめ」と、大きく三方面に関する回答が見られた。代表的な回答を一部抜粋して、以下に書き出す[4]。

[効率面]

- 「教科書を勉強するより、こういう勉強する方法はもっと効果がいいと思います」
- 「漫画は日本の普通の言葉が多くあります。」
- 「絵で理解しやすい」
- 「わかりやすいですから、漫画を読むとき、イメージとその中のキャラー[=キャラ：キャラクター：登場人物]の話と合わせて、きっと日本語が上手になる。わからないところも、だんだんわかると思う。」

[情意面]

一番多い回答は「おもしろい」といったシンプルな感想であったが、以下のような回答もあった。

- 「いいと思います。教科書はちょっと硬いです。漫画やインターネットで日本文化のおもしろさを了解します」
- 「普段授業の緊張感と違い、「遊びながら、勉強をします」「趣味と勉強を一にまとめる」感じます」
- 「面白いけど、日常会話で使えるだけ、ビジネスの場合ではちょっと・・・　日本の興味がアップですから、このき[っ]かけにやる気があるようになるかもしれません」、
- 「漫画―とてもおもしろくてわかりやすい。」

[発展・まとめ]

全体的に、このように質問することで、ただ自分の感じたことを書いている学習者だけでなく、その教材のもつ本質について客観的に述べる学習者もいた。

- 「二つ漫画を持って、一つは日本語で、もう一つは中国語、訳。」
- 「漫画を読んだ後、初めて見る言葉をもう一度読んで、辞書で中国語の意味を見ます。こんな方法はいいと思います。」

お薦めの勉強法に関する自由記述の質問(5)に対する手段の回答例は、マンガやインターネットの他に、小説、絵本、パンフレット、ドラマ、歌等が挙げられており、方法としては「字幕を見ないでドラマやバラエティを見る」「わからないところを書いて、辞書で調べる」「日本人の先生や日本人の友達とおしゃべりする。MSN でもいいから喋る」等、書いており、2007 年も 2008 年も似たような回答が多かった。

3.3 授業実践時の観察データ

2007 年度の実践で印象的だったのは、今まで簡単な質問に対しても一度も手を挙げて発表したことがない学生 2 人が手を挙げて自分達の意見を発表したことである。また、2008 年度実践の状況も 2007 年度の状況と類似していた。

更に、その活動の次週に、クラスメートのお薦めの日本語勉強法をまとめたファイルを補助として見せながら、口頭で紹介した際、通常授業以上に真剣な面持ちで必死に聞いていたのが印象的であった。他のクラスメートがどのような勉強方法を用いているのか、どのような効果的な学習方法があるのか、という点に興味を示したと思われる [5]。この点も 2007 年度、2008 年度、共通していた。

以上の様々な種類のデータの結果から、このマンガ・モジュールの実践は、少なくとも学習者の認識レベルにおいて、有意義な実践であったことが明らかになった。

3.4 実践することで教師が学んだ内容と改善事項

2007 年度(1 回目)実施時の学習者の反応(観察データ)やアンケートから、学習者にとって有意義な活動であることがわかったので、次年度に同じクラスを受講した学習者に対しても同様の活動を実践した。2 回実践した結果、学習者にとって有意義な活動であることがクローズ質問のデータから把握できた。よって、3 回目以降、同じクラスの受講者に対し同様の活動をした際に、学習者のメタ認知を刺激するオープン質問は重要であるが、教師が学習者の認識を全体的に把握する為のクローズ質問をする必要性は低いという結論に達した。

2 回の実践を通じ、3 回目実施時には、更に学習者のオートノミーを刺激するフォローアップ活動を企画することを考えついた。それは、マンガ・モジュール実践直後に、学習者に日本語習得に役立つメディアについて考えさせ、学習者が考えついたメディアをクラスで共有し、各メディアの特徴についてグループで話し合わせ、その内容をクラスで共有するというフォローアップ活動である [6]。このように、教授モジュールが効果的に機能しているか調べ、効果的に機能しているものを厳選し、それを改善していくことにより授業改善が可能となる。

3.5 教師の視点：教授モジュール管理に関する内省

2 年目(2008 年)に教授モジュールを教える為の準備は、1 年目(2007 年)に実践した時に用いた配布資料、プロセス手順のメモ、内省メモ(感想、改善アイデア等を記したメモ)等を見れば、何をすべきか、すぐに思い出すことができ、殆どする必要がなかった。また、どのような状況が起こりうるのか事前に予測することができたという点も挙げられる。以上の一連の実践を通して、意識的に教授モジュールを管理することにより、効率よく授業準備をし、効果的な授業を実践することができることが再確認できた。

4. 総合考察

4.1 マンガ・モジュールを通じて、学習者のオートノミーを促進できたか

前述の結果から、学習者が興味を持ち必要だと考える教授モジュールを実践した場合、授業時間内だけでなく、授業時間外の学習者の態度や意欲に影響を及ぼすことも可能であることがわかった。Scharle & Szabó(2000)は、学習者に自分の学習に責任を持つという感覚を育む方法を紹介し、そのプロセスは①意識させる、②態度を変化させる、③役割を委譲させる、と述べている(p.9)。今回の実践で、たとえ一部の学習者の行動を(認識レベルで)変容させることができなかったとしても、本実践を通じて彼らの語学学習の効果に影響を及ぼすメタ認知に有用な刺激を与え、オートノミーを促したのであれば、有意味な実践だったと言えるだろう。

学習者達が楽しみながら学ぶ時、「教えられる」という立場から「参加する」という立場に変わるのではなかろうか。記述式回答からも、「楽しみながら学習する重要性」を述べた意見が多かった。パターン練習が中心の教科書を用いて、授業をするのであれば、尚更のこと、このような学習者にとって意義のある内発的動機づけを高めるような教授モジュールを設計し実践すれば、実践時だけでなく、その後の授業時間も学習者の集中力が期待できることが観察された。学習内容が新奇的で興味深く有意義だと学習者が認識する時、学習者の覚醒レベルは知識を吸収するのに最適なレベルになる(Lefrancois 2000:308)。似たようなタスクを長時間している状態に比べ、通常の授業と違う内容を学習し、頭がリフレッシュされた為と考えられる。

学習者がオートノミーの重要性を意識し、学習者オートノミーを育むような内容を授業内容に盛り込むことは重要である。その為には、学習プロセス

の自由度(学習者が自己の学習について決める決定権)をいくらか認め、学習者が自分の学習に関して自分で決めるという学習者の独立性を高めることが、学習者が自己の学習に責任を持ち、自律的な態度を喚起したり強めることにつながる、と Scharle & Szabó(2000:80)は考えている。彼らの考えと本研究の結果は一致している。

教授モジュール実践後のアンケートで感想やその他の効率の良い学習法に関して質問することで、学習者が自分の学習に対して客観的に見つめなおす機会となり、学習者オートノミーを促したようである。自らの学習について適切に内省することで、オートノミーを育むことができるが、内省の能力というのは誰もがはじめからもっているものではない(青木 2001)。青木は、教師が、内省の機会を作ったり、内省の手がかりとして学習者に質問をしたりすることで、内省の力を育成する必要性を述べている。学習者が、自発的に授業に参加し、自分の言葉で感想を書く時、受身の状態から、主体的な状態になる。アンケートのオープン質問に答えるというのは、刺激に反応するだけではなく、その授業内容を内省し自分の意見を表明する機会であった。自分が学んだことを自分の経験や考えに照らし合わせ、書く時、その授業内容は学習者にとってより深い内容のものになる可能性を秘めている。これは、教師が教えるのではなく、自分で知を創り出し、意味をもたせる活動として重要である。自分の考えを表現しようとするプロセスにおいて、頭が整理されるだけでなく、自分の情報、知識、知恵として根づかせ、自分のモノとして感じ、行動に結びつく可能性が高くなるのではないだろうか。この学問的推測を支持する先行研究の例に、Victori & Lockhart 論文(1995)がある。その論文結果によると、メタ認知とオートノミーと学習は相互作用的関係にあり、メタ認知を育む環境を提供することによりオートノミーを促すことを示唆している。

「お薦めの勉強法について教えてください」と聞かれたことで、学習者は自分の学習方法や学習ストラテジーを見つめなおし、最適な学習方法について考える機会を与えられた。Yang(1998)は、台湾の大学における第二言語習得のクラスで授業中に学習ストラテジーを教えると共に、学習者自身に「学習プロジェクト」として、外国語学習に関するウイークリー・ダイアリーをつけさせた結果、ほぼ全ての学習者がその学習体験プロジェクトが有意義であったと評価した事例を紹介している。オートノミーを能力の側面から捉えるのならば、学習ストラテジーの理解・実践やメタ認知の発達がより効果的なオートノミー学習につながることを想像するのは難しくない。マンガを用いた学習法に関する活動で、一部の学習者はメタ知識や学習ストラテジーの重要性に気づいたかどうかは推測の域を抜けないが、短時間で密度の高い、プラス･サイクルに入る刺激を与えたことで、学習者の内発的動機づけを高めただけでなく、学習効率を上げ、学習プロセスを楽しいものに導く可能性が示唆された。

この学問的推測を支持する研究知見としては、教師と学習者間を可能にするコミュニケーション・ツール(代表例：大福帳)に関する研究がある。大福帳とは、教師と学習者が書面でコミュニケーションをとることを可能にした 1 枚の(A4 版厚紙に両面印刷済)カードであり、織田が 1988 年に考案した(織田 2006)。大福帳の通常プロセスは授業実践後に学習者が感想・質問等を書き、授業時間外に教師がそのメッセージに対してコメントを書き、次の授業が始まる時にカードが学習者に返却されるというプロセスである。このような教師・学習者間のコミュニケーション・ツールを用いることで、教師と学習者間の１対１のコミュニケーションが可能となり、それが受講生の積極的参加と内容理解につながることは、多くの研究で明らかになっている。毎週、授業者と受講生間でコミュニケーションカードを用いてコミュニケーションをとった南部(2005)の実践では、その実践が理解の深化、学習動機づけの強化、ラポール構築、皆で授業を創造しているという土壌構築に有用であることが示された。また、向後(2006)の研究では、教師が返信を書かなくても、書くことで学習者の理解が促される等、一定の成果が示唆された。

以上の先行研究の知見と本研究の結果から、本研究の実践は、学習者に刺激を与えた後に効果的な外国語学習(習得)方法を考えさせることにより、学習者のメタ認知に刺激を与え、またその学習者の知見をクラス全体で共有することにより、学習者のメタ認知的知識が増えただけでなく、学習者間の協力的な関係が強化され、クラスの結束力が強まる働きをしたと考えられる。

4.2 教授モジュール管理に関する示唆

4.2.1 教授モジュールとして管理する意識

本研究の教授モジュールのように、マンガ 2 ページ分のコピーのような素材のみ手元にあっても、授業実践に役立たない。その素材をどのようなコンテクストでどのように活用するかが重要だからである。また、教授モジュールを実践することで得られる、状況に埋め込まれた知識(気づき、問題点)を次の実践に活用することが授業改善につながる。

本研究のように素材を用いた教授モジュールの場合、授業準備に時間がかかる。一回だけ実践する活動の為に、毎回一から活動の準備していては、非効率であり、非効果的であるだけでなく、多忙な実践者(教師)にとって現実的ではない。そこで、本研究では、教材や素材のみならず、活動に関して有用な情報・データ・知識を意識的に収集し、各教師が管理しやすいと思われる方法で管理し、有効的再活用することを提案している。

この教授モジュールという概念の重要性を意識し、教授モジュールを用いた授業を実践することが、応用レベルの会話クラスのように、教科書に頼らず、教師が素材を多用し授業設計をしていく授業において特に重要である。

他人が決めた枠組みのもとに、教材・タスク・活動に関する情報を管理することは、各教師のコンテクストに最適ではなく、教師を受身の存在にするという点で、筆者は反対である。教師一人一人が、自分ができる範囲内で、自分にとって便利で効率よく効果的な管理システム(自分が思い出すことができるように知識を保存し、いつでも取り出したい時に取り出せるシステム)を考え、実行し続けることが重要である。授業で用いた資料、教授手順を記したメモ、教材に関する質問、内省メモ、ダイアリー等、すぐに取り出せるようになっている場合、それらを見ただけで、何をどうすべきか思い出しやすくなり、それが時間短縮につながり、かつ更に効果的に教えることができるだろう。教授ポートフォリオ管理という考え方もあるが、それは作成に時間がかかるのが難点である。各教師が自分の授業の質と効率性を高める為に、自分にとって都合のいいシステムを構築していけば、時間をかけずにモジュールを管理し、それが効果的な授業の実践につながることであろう。

4.2.2 学習者に関する情報・知識・理解に基づく教材作りの重要性

鄭(2002)は台湾の大学における日本語会話教育に関する実践研究を行い、教師は学習者がよりオートノミーになるような授業を展開すべき(p.177)と提案しており、筆者も同感である。

重要なことは、まず学習者を知ることである。学習者を知れば知るほど、より学習者にあった教材・タスク・活動を選択・編集・設計することができる。学習者を知るというミクロな視点だけでなく、学習者をとりまくマクロ環境を理解することで、より効果的な授業設計・実施が可能になる。学習者にとって効果的な授業を追求する時、学習者の状況を基軸とした授業内容も取り入れていく必要がある(澤本 1998)。

5. まとめ

本研究では、オートノミーを中心とした先行研究の知見・授業実践での気づき・学習者に関する知識を基に、教材・教授法・教授方略の統合知識である教授モジュールを設計し、実践し、その学習者の意識に関するデータを様々な角度から集め、分析した。結果、限られた時間などの制約の中でも、学習者のオートノミーを促すことは可能であることが、少なくとも本事例で明らかになった。また、教授モジュールを単位として管理することで、教師の授業準備時間の短縮、教授知識の効果的な累積、授業改善、最後に教師の成長が可能なことが示唆された。

本調査は、マンガ・モジュールに対する、認識レベルにおける学習者の態度と行動を把握できたが、態度の変容や行動の変容は調べられていない。本研究と類似した動機から実践研究を実施した調査に Ryan(1997)がある。Ryan は、オートノミーを発達させることは、長期的に見る必要があるとしながらも、学習者の肯定的なコメントを挙げることで、実践の成果を示した。本研究では、マンガ・モジュールを学習者オートノミー発達のきっかけとなることを意図して設計されたが、教授モジュール実践直後の学習者の認識レベルにおけるデータの他に、学習者の態度や行動の変容を調べるには各学習者に密接したデータを長期間とっていく必要があるだろう。

学習者のオートノミーを促す為には、まず教師が学習者のオートノミーの重要性を認識し、授業で刺激を与えられる可能性を認識し、熱意をもって計画・実践することが重要である。

謝辞　査読者の方々から貴重なご指摘･ご示唆を頂きました。ここに深く感謝の意を表します。

注

1. マンガ・モジュール自体が効果的かどうかは、主に 2.4 章に記述されたアンケートの質問に対する学習者の認識、及び実践中の学習者の反応・態度・行動によって判断する。
2. 「こちら葛飾区亀有派出所(略称「こち亀」、中国名では「烏龍派出所」)」(秋本, 1997, pp.72-73)
3. 具体的にはマンガを日本語学習に役立てることで、学ぶことができる点とできない点を、一斉授業でインターラクティブにコミュニケーションをとりながら説明した。また、マンガを活用することは、一例であり、他のメディアには他のメディアの優れた点とそうでない点があることを説明した。教科書以外に教材となり得る素材は多く存在し、そのメディアの特徴を理解し、活用する重要性を述べた。マンガを用いて勉強せよ、または他のメディアで勉強せよという指示は一切出さず、このモジュール体験後、学習者がどのような行動をとるかは学習者次第であった。
4. 生のデータを提示することで学習者のレベルを理解することができると考え、たとえ文法や単語の間違いがあったとしても、意味が通じにくいと判断した２箇所([　]の括弧内に字を追加、もしくは説明を追加)以外は読者が想像し理解できると判断したので、学習者のコメントを鉤括弧内に直接書き出した。
5. あくまで教師の認識によるものであり、客観的データではないが、教師が認識した通常の状況と比べての違い(表情など学習者の身体的状況に関するデータ)は客観的データとして提出しにくいが重要であると判断した為、記述した。
6. 2 回実践することで、学習者オートノミーを発達させる為にも、更に学習者が主体的に考え・話し合う時間を増やす必要性を認識した。そこで、フォローアップ活動を考えついたわけだが、初めから実際に実践した内容を企画したわけではなかった。最初の考えでは、話し合わせる素材の項目は教師が指定しようと考えていた。その授業計画をメモしている際に、よりオートノミーを育む為には、項目も学習者に考えさせる必要があるということに気がついた。その気づきは、それまでの過去の実践を通じて得た暗黙知と学習者オートノミーを育みたいという意識の上に表面化したひらめきと考えられる。

参照文献

青木直子(2001)「教師の役割」青木直子・尾崎明人・土岐哲(編)『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社, 182-197.

岡崎敏雄(1989)『日本語教育の教材』アルク

岡崎正道(1993)「ドラマ・漫画による日本語教育」『アルテス・リベラレス』 53、39-53.

Oxford, R. L. (1990). Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know [M] Rowley. Mass: Newbury House.(宍戸 通庸・伴 紀子(訳)(1994)『言語学習ストラテジー 外国語教師が知っておかなければならないこと』 凡人社)

織田揮準(2006)「形成的評価手法(大福帳)を用いた授業改善研究」『皇學館大学文学部紀要』第 44 輯, 300-324.

小野正弘(2009)『オノマトペがあるから日本語は楽しい』平凡社

川那部和恵(2006)「異文化理解教育における実践的アプローチの可能性」『教育実践総合センター研究紀要』15, 53-60.

向後千春(2006)「大福帳は授業の何を変えたのか」『日本教育工学会研究報告集』06(5), 23-30.

澤本和子(1998)「教材を研究する力」浅田匡・生田孝至・藤岡完治(編)『成長する教師』金子書房, 24-41.

三宮真知子(2000)「メタ認知」日本教育工学会編『教育工学事典』実教出版, 482-483.

田代ひとみ(2009)「批判的思考能力育成をめざしたクラス活動の試みー学部 1 年の留学生に対する実践からー」『言語文化と日本語教育』37, 78-81. [ポスター発表の要旨] (第 37 回日本語文化学研究会, お茶の水女子大学, 2008 年 11 月 29 日)

因京子(2005)「日本語学習者の日本語会話解釈上の問題点: 日本語学習者によるマンガ理解を通して」『比較社会文化』11, 83-92.

鄭婷婷(2002)『台湾における日本語会話教育の研究』致良出版社

Deci, E. L.(1992)「学習と適応: 教育と内発的動機づけ」『教育心理学年報』31, 35-39. [準備委員会企画特別講演抄訳](中山勘次郎(抄訳)日本教育心理学会第 33 回総会, 上越教育大学, 1991 年 9 月 21 日~23 日)

南部昌敏(2005)「コミュニケションカードを用いた授業改善の試み」『上越教育大学研究紀要』24(2), 665-676.

野嶋栄一郎(2000)「学習モジュール」日本教育工学会編『教育工学事典』実教出版

Benson, P. & Voller, P. (1997) "Introduction: Autonomy and independence in language learning". In P. Benson and P. Voller (Eds.), *Autonomy and Independence in Language Learning*,1-12, London: Longman.

Dickinson, L. (1995) Autonomy and motivation a literature review, *System*, 23(2), 165-174.

Holec, H. (1981) *Autonomy and Foreign Language Learning*. Oxford: Pergamon Press.

Hutchings, P. (1998) Defining features and significant functions of the course portfolio. In P. Hutchings (Ed.), *The Course Portfolio: How Faculty Can Examine their Teaching to Advance Practice and Improve Student Learning,* 13-18. Washington, DC: American Association for Higher Education.

Hutchinson, N. L., Freeman, J. G., Downey, K. H., & Kilbreath, L. (1992) Development and evaluation of an instructional

module to promote career maturity for youth with learning difficulties. *Canadian Journal of Counselling/Revue Canadienne de Counseling*, 26(4), 290-299.

Lefrancois, G. R. (2000) *Theories of human learning: What the old man said*, (4th ed.). CA: Wadsworth: Thomson Learning.

Little, D. (2003) Learner autonomy and second/foreign language learning, *Guide to Good Practice*. Available at http://www.llas.ac.uk/resources/gpg/1409 [Date of Access: 2009.07.01].

Reeve, J., Jang, H., Carrell, D., Jeon, S., & Barch, J. (2004) Enhancing Students' Engagement by Increasing Teachers' Autonomy Support, *Motivation and Emotion*, 28(2), 147-169.

Ryan, S. (1997) Preparing learners for independence: resources beyond the classroom. In P. Benson and P. Voller (Eds.), *Autonomy and Independence in Language Learning,* 215-224. London: Longman.

Scharle, Á & Szabó, A. (2000) *Learner Autonomy: A Guide to Developing Learner Responsibility;* Cambridge: Cambridge University Press.

Victori, M., & Lockhart, W. (1995) Enhancing metacognition in self-directed language learning, *System*, 23(2), 223-234.

Wenden, A. L. (1998) Metacognitive Knowledge and Language Learning, *Applied Linguistics*, 19(4), 515-537.

Williams, M., & Burden, R. L. (1997) *Psychology for Language Teachers: A Social Constructivist Approach*, Cambridge: Cambridge University Press.

Yang, N. D. (1998) Exploring a new role for teachers: Promoting learner autonomy, *System*, 26(1), 127-135.

きはら　なおこ／早稲田大学大学院

naoko.kihara@ruri.waseda.jp

A study of *Manga* module promoting learner autonomy: A case of Japanese conversation class at a university in Taiwan

KIHARA Naoko

Abstract

It is important for foreign language learners, whose environment does not require to use its foreign language in their daily life, to be autonomy in order to acquire its foreign language. Since 1980's, the concept of autonomy has received the attention in the foreign language education field; however, few action research related to promote learner autonomy has been reported. This paper is an action research in which the author designed the activity with *manga* intended to promote learner autonomy, implemented its activity in the Japanese conversation classes opened for the junior level students of Japanese major, collected data from various angles, and analyzed its data. In addition, the author proposed the concept of instructional module management as a method of managing instructional units by combining instructional method as well as materials, which are not in textbook, and conducted its action research based on its concept. As a result, it turned out to be clear that the instructor's attempt to promote learner autonomy in class resulted in its most learners' behaviors' change outside of the class in the learners' cognition level. In addition, this paper reveals the significance of letting learners' to think over the effective learning method post to stimulate their metacognition. Even in the constraint such as limited implementation time, the potential of fostering learners' autonomy was successfully revealed in the learners' cognition level. Furthermore, managing instructional module consciously led to the shorter time of preparing class, accumulation of instructional knowledge, and effective lesson.

【Keywords】learner autonomy, Japanese conversation class, instructional module, *manga*, Taiwanese majoring Japanese language

(Graduate School of Waseda University)